

昭和
和和
二十四
四十五
年

八七
月二十
月十三
十五日

第三
種郵便
物認可
行(每月
一回・十
五日發行)

(通第二五五号)

慈

光

第二十二卷

第八号

目次

因果応報は宗教的自覚なり……………	近角常観……………(1)
雪 ぼ と け……………	福島政雄……………(4)
人は如何に生きるべきか ——正定聚について——……………	白井成允……………(7)
筑紫野春草師を悼む……………	聚 墨 生……………(13)
本願成就文に就いて (2)……………	花田正夫……………(18)
と も し び……………	聚 墨 生……………(22)

因果応報は宗教的自覚なり

近 角 常 観

「因果応報」といえば、誰も充分承知していると思えども、真実これを自覚することはむづかしい。全体、世人はこれをもってあたかも一個の学説のごとく取扱えるは大なる誤りである。すでにこれをもって学説のごとく考えるゆえに、理屈があるとか、ないとかいうことを穿鑿（せんさく）するようになる。

私は因果応報ということとは、人間天賦の宗教心に存するものにして宗教の経験より来りたる自覚であると考える。私も以前は、宗教としてさほど重き点でないと考えておった。又随分、世の信者と称する人が、因果応報といえることを尊重して、ほとんどその人の信界には、この外に仏もなく神もなく、これをもって信仰の骨髄としているのを見て、能くもかく単純なことで安心出来たものじやと多少あやしく思ったことがあった。しかし今より考えてみれば、たしかに私もこれを一個の学説の如く冷やかに眺めていたからである。

あらわれている如く、人の命おわらんとするとき、一生の行動を想起して、或は悔い、或は懼れることの多きは、つらつらこれを想像するに、実に争うべからざる真情であるかと考える。

されど、今私は世人の常套語の如く思える因果応報の文字を引出したるは、これを客観の地位において眺めるためでない。深く自分自身が自己の身に引受けてこれを味いたいのである。言葉をかえて言えは、これを教理として眺めずに、人々これを自覚として貰いたいのである。もちろんこれを理屈として眺めた方がすこぶる微妙なる考えであるということは、誰も感ずることであるが、ただ微妙であると言っている間は批評眼の地位から眺めておるのである。宗教のことは批評ではいかぬ、自覚でなくてはならぬ。たとえば、家庭の事について考えてみるがよい。若し主人たる人が心得よくして我が妻子、下女下男に対しても、やさしく親切に取扱ひ、一家の間が和氣霽々（わきあい／＼）として、自然子供等にいたるまで何のおそるるところもなく、健全に発達するとき、もしこれを外部よりみて、主人の心得がよいから、子弟までがよいと、単純に批評し去ればそれまでのことであるが、若し主人たる人が、その美しい家庭内において、我は如何にも幸福なものである、如何なる果報にやと、身にしてみてもこれを感ずるとき、油然とし

人々皆、胸に手を当てて自分の心に問うてみるがよい。人が悪いことをして、たとえ他人は知らずとも、悪いことの仕得（しどく）ということは、とても考えられぬ。因果応報といえは、仏法臭いと考えるものが多い。しかしこれをもって仏教の教理であるということを考えずに、単純に内心の実験に訴えてみるがよい。種々の困難に遭遇したるとき深く前後をかえりみるに、必ず思い当ることがある。プラトーンが輪廻（りんね）の説を教えるに、馬鹿なもののは驢馬になるとか、牛の如き所作をなすものは牛になるとか言っているが、随分わが国の諺にも同様の事が多い。随分浅薄なる俗な考えのようであるが、自然に何処にも同じ考えを生ずるということはすこぶる意味のあることと思ふ。輪廻説であるとか、業相續であるとか、諸種の教理はしばらく問わず、全体の所作が勝手に行えは、それきりで消滅するとは思えない。このことは如何にしてもこぼむことは出来ぬ。これは人心自覚の有様である。古来歴史上に

て感謝の念をともしないきたるのである。かくありてはじめて因果応報の味がわかるのである。

また、この如き家庭に反して、家内の空気がすこぶる殺風景にして、邪見なる暮しをしているときは、おのずから物凄じき氣風が行われてとかく不和の絶えぬようになる。その時、主人たるものが自己の欠点に気がつかぬときは、ただ他人の心得が悪いとのみ心得て、益々怒りを増し、反省する氣を起さぬ。もしこの時、一点をかえりみるころが起って、かく妻子眷属、下女下男の輩にいたるまで、各勝手を主張する所以のものは、そも／＼わがあまり氣儘なる結果である。われすでに氣儘をなしてこれが手範を示した以上は、他人がその通りにするのももつともなことである。わが子のわが欲する如く行わぬは、我がかつて親に対して従順ならざりし結果である。わが下女下男の勝手なるは、我が他人に対して勝手をしている反響である、と深く自己現在の境遇をもって、自己が過去の行蹟に照らして見るに、歴々思ひあたることありてそらおそろしき心持がする。この如き場合において、決して他をとがむべからず。全く自己の身より出したる傷であることが分つてみれば、ただ満身汗を流して懺悔するより外はない。かくの如き場合において、因果応報といえる語は耳に響いて胸に釘をささるる心地がする。これが因果応報を自覚したと称するの

である。これを要するに、感謝も懺悔も因果応報の自覚より流れ出でたる結果である。

人間の意志は自由であるという考えは、我々の心に訴えてこぼむべからざることであるが、その自由に善にあれば、悪にあれば、行動したる結果は消滅しない、ということも我々の心に訴えてこぼむべからざることである。若し充分宗教心が円熟して来るときは、この自由に行動したことまでがわがはからいではなかった、仏の恵みに気付けるように仏陀が手まわしして下されたとわかる。若しこの地位に達するときは単に自己の意志がなくなつて仏陀の意志ばかりとなり、自己の周囲に集り来るものとして仏陀の源泉より来らざるものはない。ただに人意的の行動においてのみ仏陀の意志がともなうばかりでなく、天地の現象の如きことまでが一々意味を有してくる。困難なることがあれば、仏陀がわれをうながし給うと思つて大いに励み、幸運あるときは、仏陀の冥祐(めいゆう)の結果であるとさとして深く感謝の念をおこし、変事あるときは仏陀が、いましめを下してその頭をただし給うと知つて懺悔する。されどその仏陀の意志が、全体もとを探ぐると、我々の所作に対する御思召しである。ここに至つて考えてみれば、因果応報の外に全体宗教があるべきはずはない。

(信仰余瀝より)

ただ信心を要とす

譬えば人ありて、高き岸の下にありてのぼるあたわざらんに、力強き人、岸の上にありて、綱をおろして、この綱にとりつかせて、われ岸の上に引きのぼせんと云わんに、引く人の力をうたがいて、綱の弱からんことをあやぶみて手をおさめてこれをとらずば、さらに岸の上へのぼることを得べからず。

ひとえにその言葉にしたがうて、たなごころをのべて、これをとらんには、すなわちのぼることを得べし。

仏力を疑い、願力をたのまざる人は、手をおさめて綱をとらざるが如し、菩提の岸へのぼることかたし。

ただ信心の手をのべて、誓願の綱をとるべし。仏力無窮なり、罪障深重の身を重しとせず。仏智無辺なり、散乱放逸のものをすつることなし。ただ信を要とす、そのほかをかえりみざるなり。

(聖覚法印、唯信鈔)

雪ぼとけ

此の世の有様を見れば、春の日に雪ぼとけを作つてそのために堂塔を営むようなものであるとは、兼好法師の言葉であつたかと思ふ。まことに此の言葉のとおりである。豪家や財産家はいざ知らず、中流の中ぐらゐの生活をしている人であれば、大てい死ぬる少し前になつてようやく自分の家というものが出来る。その家が出来てやれ／＼、自分の家に住むようになったとよろこんで落着いて、さて四五年も経たないうちにその本人は死んでしまう。

よそ事ではない。私の父がそうであつた。広島で晩年に低利資金と恩給とで家を建てて楽しんでその家に住んだのが五年足らずであつた。私への遺言は一生涯此の家に住めということではなかつた。出来たならば政雄の代に東京へ出よということであつた。私はその後十五年此の家に住んでいたが、満州へ飛び出して行く時、それを人手に渡してしまった。それから僅か五年の後に此の家は原爆で吹き飛んでしまった。今更ながら「春の日に雪ぼとけ」の文章

福島政雄

が心にうかぶ。

方丈記には言う。「又知らず、仮の宿、誰が為に心をなやまし、何によりてか目を悦ばしむる。その主人(あるじ)と住家(すみか)と、無常を争ひ去るさま、いはば朝顔の露に異ならず、或は露おちて花残れり。残るといへども朝日に枯れぬ。或は花は萎みて露なほ消えず。消えずといへどもゆふべを待つことなし」われや先、家や先である。どちらが早く無常の風に散るか、人生の事全く予断を許さないものである。

或る人は晩年に立派な家を建てられて、若し両親に此のような家に住居させたならば、さぞ喜んだであろうと悲しまれたということである。併し此の人が亡くなられてやがてその家は人手に渡つてしまつたという。立派な家を残しても財産を山と積んでも、万巻の書籍を残しても、必ずしもそれが子孫によつて保たれるものではない。結んだ水がやがて融けるようなものである。此の世のもので永遠のた

よりになるものは一つもない。

私も今は数え年の八十二になっている。無常の理（ことわり）はわかっていても、やはり世間の方々と同じ様に、出来れば自分の形見のつもりで家を建てて子供にのこしてやりたいという法外な心が無いではない。併し還歴の齡以來、処世の道をあやまり、教職追放などにもなり、今零落の此の身には自分が死ぬべき自分の家を建てる力もない。「行き行きて倒れふすとも萩の原」という古人の句を口ずさんで見ても私の心はこんなにすっきりとはなっていない。此の世の住居というものに対する執着心はなか／＼去らない。

永遠の住居はお浄土である。此の感じは私に生きている娘を二人も亡くし、父母を亡くし、妹やその他大切な人々を次々に此の世から失った私には、お浄土という感じが生きている。併しその私に死の問題がはつきりと解決出来ているとは言えない。此の世の住居に執着を持っていて私には、聖人の仰せのとおり「未だ生れざる安養の浄土は恋しからず候こと、よくよく煩惱の興盛に候にこそ」という心持があるばかりである。「雪ほとけ」の仏という言葉が自分に相応するとは思わないが、やがて春の日の雪のように融け去って行く自分のいのちがまだまだ続いて行くように思われる。私はそれほど浅薄な人間である。今生への執着

深い。父は世を去り父がのこしてくれた住居は原爆に吹き飛んでも、仏のお浄土からひびく父のまことは私に深く感ぜられる。

そこは永遠真実のまことである。近角先生はいつも仏のまことという言葉でお説きになった。まことの信心の光である。此の光は心の奥底を照す。その光によって国家社会が真実の姿で照し出される。君は君たり、民は民たり、父母兄弟の正しい姿が此の信心の光によって照し出される。近角先生は熱誠を以て此の事をお説きになった。

信心の光の中に日の本の

まことの姿見ゆとのたまひし

兼好は「人間のいとなみあへるわざを見るに、春の日に雪仏を作りて、金銀珠玉のかざりをいとなみ、堂塔を建てむとするに似たり」という。その金銀珠玉堂塔は結局泡沫の営みであるという。それは泡沫である、雪仏と共に泡沫に過ぎない。併しその泡沫を縁として仏のまことを感じて行くと泡沫そのものに深厳な国家社会の秩序を感ずるようになる。父母兄弟の恩を感ずる。雪ほとけが融け去り堂塔が倒れる時、此の迷の人生に仏のいのちは徹する。私はそこに此の人生の豊かな味わいがあることを感ずる。

（昭和四十五年五月二十一日）

迷いの心が止まないものである。

生れて二年八カ月で此の世を去った和子は、此の世の住居を否定して「はやくおうちへかえりましょう、すぐにおうちへかえりましょう」という言葉を最後の言葉として、お浄土へ帰って行った。私はそのお浄土へ帰って行くうしろ姿を見送るような心持であった。二十六歳で死んだ直子の最後の言葉は「仏様が見える」というのであった。私はこれを観無量寿経往生というように感じている。釈尊のお力で草提希夫人の前にお浄土がはつきりと見えたのである。観経に描かれているお浄土の風光は遙かに遠くしてまた極めて近い。併し直子を亡くした後の私は茫々として迷い暮すという有様であった。京都大谷の本願に遺骨を納めに行った時はただ寂しかった。

吾娘（あこ）が舍利納めて仰ぐ親鸞の

みたまや淋し時雨降り来る

母を亡くして十年ばかりの後にはじめて親のいのちというものがわかり始めた。そして「尽十方の無碍の光明に一味にして」ということを親のいのちに感じはじめた。私は世を去った親の上に雪ほとけを感ずる。此の世の親の肉体は雪のように融け去った。併しそこに永遠のほとけの真実生命が感ぜられる。雪は融け去っても仏陀のまことは永遠に此の私にひびく。否雪ほとけなればこそ私へのひびきは

牛ほど大きくなりたい蛙

登張 竹風 訳

蛙がある時、牛を見て、雄々しい姿が目についた。

鳥のたまごにくらべても、まだ／＼負けそな小身で威張るわ／＼脚ひろげ 身をふくらしたり気取ったり牛ほど大きくなりたいがる。

さてその御意にのたまわく

『これ／＼見てくれ、わが妹

これで好かるう、こりや、どうじや

まだいけないか、云うてくれ――

――駄目、だあーめ。

これでもかい――柄に無いのよう、兄さん!!』

性こりも無い蛙、お腹が裂けて死んだげな。

世の中に、これに劣らぬ人だらけ

貴人氣取りの馬鹿普請

御使者欲しがる小大名

爵位を賜はりや御前様

（ラフオンテーヌ物語）

――第二高校発行、慈光より――

人は如何に生きるべきか

——正定聚について——

白井成元

予は今現に生きている是れ予の意識するところである。同時にこの意識はまた予の必ず死ぬべきことを告げる。然らば、現に生きつつやがて死ぬべきこの生に何の意義があるか、と予は自ら己れに問わざるを得ない。然るに生の意識を問うのは、生の理想を問うのである。理想ありて其を証し得るならば、生きる意義もあり得よう、理想無く、理想を証し得ないならば生きるに価しないであろう。

然らば此の生に果して理想があるか、それは如何なる内容のものであろうか、其は現実には証し得ようか、此の問いは、生の意義の醒めと共に必然に起らざるを得ず、而も其が答えられざる限り心安らい得ざる問いではあるが、然し問いの本質を見誤れる愚かな問いと云わねばならぬ。理想は、其の有無を問わさるべきものではなくて、有らねばならぬものである。そして其の内容は証と相応する。其の証も可能か否かと問わさるべきでなくして、証せねばならぬも

のである。但し上の愚かな問いから此の正見に移る歩みには、恐らく、人の媒介を経るを要するであろう。云う意は、真実に理想を証する道に生きた人々があり、その人々を見ると、徒らに理想を否みて躊躇（ためら）い悩む事は寧ろ懈（おこた）り慢（おご）れることに過ぎざることが知らされるからである。懈慢（けまん）は理想を証せんとする魂の死に他ならない。

然るに理想の内容として何が証せらるべきかを思う時、予は予の生が人倫に於いてあるという意識に醒（めざ）めざるを得ない。則ち理想の内容も、予の証すべき個性的のものであると同時に、あらゆる人々に徧（あまね）き意義を有するものでなければならぬ。普遍性を省みると、人倫を成立たせる根源の作用として、時の古今を問わず、処の東西を隔てず、いやしくも人として其に於いて生きるべき道があり、その道を全く証するところに理想があると知られる。随って、人生を意義あらしめる根源の作用として

理想は日々の生活に於いて其自を証するものでなければならぬ、証が即しなければ、其は妄想に過ぎない。もとより理想の円現は将来にかかるので、現実には期し得ない。けれども、この事は、現在を将来の為の手段と化することではないであろう。もし単に然様な意義に於いて生きるならば、是れ理想をも現実をも挙げて妄想化してしまふもの、すなわち畢竟して人の生涯に真実の意義を証する由無からしめるものと云わねばならない。然らずして、人生の究竟の理想が在るといふ信が即今日々の生活を真実ならしめるのであって、則ち理想は、まさしく其に於いて生きるべき道として日々の生の中に証せられるのでなければならぬ。道とは、具体的には各自の義務を義務ならしめるものとして、義務を行なわしめる端的の心情を規定する理法である。道に順いて動く心情即ち身に於いて道が証せられるが、その証の常にして円（まど）かなるところにこそまこととに人の究竟の理想は存するのである。（心情即ち身といふは意識に於いて内外相応一体であるから）

随って道（理法）という形式と理想（道の心情或は身に於ける証）という実質との相応するところに人生の意義が存する。則ち人は如何に生きるべきかの課題への答は、形式的には道に順いてと云うべく、実質的には理想を証しつつと云うべく、道に順うことと理想を証することとは相即

して一なる行為の両面でなければならぬ。或はこの両面を一にして「真実心に於いて生きる」とも云い得べく、又此の如く生きる者を即ち「法身」という語を以て表わし得ると思われから、此の課題への答は亦「真実心に於いて」或は「法身を証しつつ」生きるべきたとも言い得よう。そして此の生き方を私は祖師聖人によりて正定聚と稱ばれた位に於いて見るので以下を述べようと思うのである。

二、

惠信尼消息第五通によると、親鸞聖人の叡山に於ける廿年に互る求道の本来の動機は唯一つ「後世のたすからんずる」事に存した。其は六角堂に百日籠（こも）りて祈らせ給うた事、法然上人に百日通うて聴かせたもうた事を通じて恆（つね）に問われ、終に解決せられた事であり、その解決に心安んじて生涯を生き貴かれたのであるから、此の一事の問いが聖人の全き生涯の意義を聞き且決したと言い得る。そして此の問いの解決は「ただ後世（ごせ）の事は、よき人にもあしきにも同じように、生死出ずべき道は、ただ一筋に仰せられ候いしをうけ給わり定めて候いし」ところに与えられた。ここに法然上人が「ただ一筋に仰せられ」と云われる所は、歎異抄第二章にいう「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」とよきひとの仰せ

をこうぶりて」との言葉と相照らして、ただ念仏する一道に存したこと、明らかであり、此の一道によりて、「世々生々に迷い」きたり、随って「後世」にもまた必ず「悪道にわたら」ねばならぬ身の必ず「たすからん縁」が確かめられたのである。

以上の叙述は、普通に知られている事を簡単に記したただけである。然しこれだけの事の領解には私共の方にも生命がけの問いが要せられるであらう。

三、

先ず此に問われているのは「生死出ずべき道」への問いである。其は、吾等の生命が世々生々に迷い来り、後世また悪道に墮（お）つるを免れ得ざる存在である、という生命觀に立っている。それは祖聖もくりかえし告げておられる善導の「自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没み常に流転して、出離の縁あることなし」という深き信に立っている。この三世流転の生命觀を如実に己れの身に領解することなしには祖聖のただ念仏するという信心も亦領解せれないであらう。

この「三世に流転する我が身」という生命觀は、吾等に伝えられてきた仏教の伝統的生命觀である。此に立てばこそ、其が念仏によりて転せしめられた時、例えば、即ち「一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり、いずれ

て又未來際を尽くして生死の迷いを離れ得ざる我が身なる事を推し認めざるを得ない。凡そ真実なり得ざる我が身という現実の醒め程我が身の罪惡深重の根源を厳しく知らしめるものは無いであらう。不真実なる我れなるが故に、道に順わんとして却りて背き、理想を証せんとして却りて傷つけ、永却に流転せざるを得ず、而も我れ迷う時即ち直に他を迷わしめ全法界を闇くし惡趣を現わす。此の業因縁の理は、余りに深く蔽（おごそ）かにして、其の發起する由来を思い、其の結果する当来を思えば無始無際と云うより他あり得ない。恐るべきである。三世流転の生命感はこの如く不真実なる我れの内觀に於いて証せられる。

さてこの流転の身にとりて「後世のたすからんずる」、「生死いずべき」道は「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらする」事に存する、其の他には何も存しない。ところて生死を出でるとはもとより先ず我が身に於いて証せられねばならぬ事である。けれども其れは我れひとりの問題ではない。我れひとりの生死は、我が父母妻子と共に一切衆生の生死と相係わり、草木国土と相係わる。生死を出ずべき道も亦我れひとりの道ではなく、無辺の衆生海に連なり其れから離れることができない。則ち衆生と共に生死の迷いを出離するのたすけられなければならない。いわゆる自覺と覺他と併び行われるのでなければならぬ。究竟して仏と成る

もくこの順次生に仏になりてたすけ候うべきなり」という解脱の境が領解せられるのである。三世に流転する己れの身を感じることに無くしては、恐らく、四海同胞という広い觀念もなお之を十分に領解するを得ないであらう。のみならずこの生命觀を如実に信することなくして、如何にして、仏身の成立の因果、即ち法藏菩薩の發願修行といい、南無阿彌陀仏の果徳の作用という事実を信することが出来る。此の仏身の成立を單なる神話なり虚説なりと嘲り、又は、吾等の現実の生命とは次元を異にする別の生命の消息なりとして、概念化する立場に立つ限り、恐らく、祖聖の言葉は正しく領解されないであらう。吾等凡夫の身も仏陀正覺の身も共に三世に亙る永遠の身たるに於いて別は無。然し此の伝統的、仏教的、生命觀を吾等如何にして領解し得ようか。

思うに道に順うべしと云い、理想を証すべしと云う、是れ人の生の根源に醒める道德的命法であるが、之を通じて更に單純には「自淨其意」即ち真実心なれの命法が響いてくる。然るに此の命法を身に當てて省みるとき、直に見出されるものは、己れの不真実という事実である。自ら真実ならんと願いつつ不真実に墮ちる、この經驗を重ね慎み省みる時、因果の理法によりて、吾等はそこに宿業の必然を感じ認めざるを得ず、曠劫よりこのかた流転し来り、随つ

四

ところで、成仏の唯一道が念仏に存するとは「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらす」という語を云い換えたのに過ぎないが、今此の語の意義を尋ねなければならぬ。「弥陀にたすけられまいらす」とは歎異抄の文脈に於いては「往生極樂の道」を与えられる事であり、此の事は究竟して、成仏の道を与えられる事であることは、今云うを要しない。ただ念仏することと弥陀にたすけられまいらすことが如何に相係わるかが問われねばならない。則ち若し此の語を、念仏するという方途によって弥陀にたすけられるという結果を獲又は目的に到る、と解するならば是れいみじき誤解であらう。是れ弥陀にたすけられる事の内容を極樂往生又は成仏と云う結果に於いて見、其を獲得する手段として念仏するものであって、随って生涯の念仏悉く自己の力を以て修め、其の功徳を積むことによりて往生し成仏しようと欲する意図の下に為されるに過ぎず、念仏しても念仏しても成仏の理想は直に証せられ得ない。是れ即ち

理想を単に将来に期して現実を其の爲の手段と化する功利主義の立場に他ならず、則ち祖聖が之を自力の念仏と名づけ此の如き念仏者を不定聚の機と判じたまいし類に入るべき者である。

不定聚の機の念仏は善本徳本の念仏を身に行じながら、その念仏を我が身に与えたまいたる如来の本願の意を如実に受くる能わず、随って之を諸善諸徳の列に置き、自力を以て之を行ずるが故に、其の心情の根底は畢竟、邪定聚の機と判せられたる自力聖道の機と相通うものであり、己れの行善の功徳の証を臨終の来迎に置かざるを得ないような心相を具えると謂ってよいであろう。「ただ念仏して弥陀に助けられまいらす」とは此の如き心情の相ではない。

五、

ただ念仏する心情には毫末の功利的意図を存しない。其はただ如来の本願に順うのみである。本願に順うとは、仏願の生起本末を聞いて疑心あることなき信心の相である。是れ即ち煩惱に燃え罪業に狂いて悪道に墮つるより他無き衆生を悲しみ慍れみて必ず救わんと願いたちましまし、その願力によりて浄土を建立し、徳号を成就し、之を衆生に廻向して、衆生をして浄土に往生せしめ即ち成仏せしめたまう如来の眞実心の徹到せる相である。もとより浄土に往生しようとか、仏となろうとか、我が心から計らい欲して

慧に照らされるからである。則ちただ如来の大悲に触れておのずから慍愧せしめられるのである。だから慍愧にはいつも感謝が伴う。則ち如何にしても眞実になり得ざる此の身を悲しみ慍れみて、必ず眞実にならしめずば我れも正覺を取らじと誓いたたせたまうた大悲心が、その悲願を成就して南無阿弥陀仏の尊号と顕われて常世に此の身に着き添うていくたさる。際涯無き宿業に縛られて不眞実に墮ちながら猶お眞実ならんと焦燥する時即ち此の尊号が響いてきて如何にしても眞実なり得ざる己れの永劫の不眞実に氣着かしめてくださる、即ち慍愧の念に洗われ浄められて大悲の智慧の指す所に歩ましめられる。此の不眞実なる者を撰取し指導して眞実清浄なる一道に立つを得しめたまう、大悲の撰護感謝せざるを得ない。

「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらす」の語を省みて此に到つたのであるが、更に省みるに、今念仏するといふ一事が既に弥陀にたすけられまいらせているからこそ可能なのであって、弥陀にたすけられまいらせることなくして吾等如何にして念仏し得ようぞ。即ちいわゆる「終日能行すれども所行海を踰えず、」念々の称名ひとえにただ大悲の誓願海から催されるばかりである。ここに一切の自力の修道行善のいとなみが悉く根底から崩れ去って、念仏の中に撰め取られ、一切の煩惱悪業挙げて転じて不可思議の

念仏するのではない。更にとりつめて云えば、煩惱罪業の我が身という感知も、眞実には、己れの感知なのでなく、ただ信知なのである。己れの罪悪感なのでなく、如来からめぐまるる機の信知なのである。罪悪感と機の深信とは信なのである。上に掲げた反省の語を用いれば、我が内心に眞実なれとの命法を聞きながら眞実なり得ざる己れに面するとき即ち己れの罪悪を感じる。然しその罪悪感が蔽(きび)しければ蔽しい程愈よ蔽しく、だから眞実にならなければならぬ、と道徳的良心は命令する。然し此の命令が起ころのは、根底に眞実に成り得る自己という觀念が前提されているに由る。此の觀念は道徳的良心又は菩提心には必ず前提されている。随って罪悪感の前提ともなっている。然し此の前提が妄想に過ぎざる事、即ち如何に努力するとも眞実になりきり得ざる身である事を機の深信は告げる。是れ如来の大悲の智慧から告げられるのである。だから機の深信に於いては、罪悪感に囚われつつ黷(よみがえ)りて眞実にならなければならぬという焦燥は無い。ただ眞実になり得ざる我れを慍愧するのみである。然しこれは我れが、云わば良心の作用としてするのはない。良心の作用には、後悔が伴うけれども、慍愧は生じない。自己の全体が根底から崩れていないから。然るに慍愧にありては自己の根底を成す良心までも崩れ去る、如来大悲の智

誓願海の風光を莊嚴せしむる妙用を為す。念仏成仏は眞宗というもの即ち此の謂である。而して是れまさしく正定聚の位に於いて証せられる光景である(続く)

セイシン御

掟

聖人の仰せは一つ一つ世人の掟(おきて)となることから、聖人の仰せを家掟(ごじょう)といわれている。

聖徳太子の三経義疏に

「経とは、法と訓じ、常と訓ず。聖人の教は、時移り俗を易うるといえども、先聖後賢、その是非を改むる能わず、故に常と称す。亦物(衆生)の軌則となる、故に法と訓ず」

とあるのも思い併せられる。

しかし、のちになって権力者がこの御掟を乱用して律法的な悪い印象を与えるようになったことは、言葉への冒瀆で悲しむべきことである。

筑紫野春草師を悼む

聚 墨 生

魚が水面で口を開く

去る六月末、師の訃音をうけ、遠く筑紫の国をしのび謹
しんでおいたみ申上げました。かねて歌集が出版されま
す、その度毎に御寄贈をうけておりました。私は和歌の道
には暗い者であります、かかげられた歌心をおして親
しく道交を蒙っております。ここに、断流、還相、遊林
の三歌集から少々抄出して、師の信徳にふれ、最後のよき
おしえを蒙るよすがといたします。金葉集にある

おしえおきて入りにし月のなかりせば

いかでこころを 西にかけまし

の一首を思い併せて念仏しております。

歌集 「断 流」

(一 生)

今更におのれが無能なげかねど可能の限界見え来しことし
不思議とは今日をわがある命ぞと聖ののらす言のよろしき

人の世のたのめなきさまや雪仏今日をかがやきて明日てふ
日なし

(所 感)

人づてに生きの悩みをもらしたる人も逝きたり幼のこして
清浄堂[✓] 积妙智信女享年三十と感深く書く今年初の法名
遂に立たざる生命とおのれさとする時万感迫るさびしさなら
む

(よ き 人)

古のわがよき人はおよそ皆苦渋の一生送りまししたる
おほけなけれ苦渋の一生を遂げませし聖徳ひて慰さまむ今

(竹 柏)

今年なほ新たに立つる望あれどひそかに思ふ余命いくばく
いたづらに我は死なじと口ぐせに言ひつゝ過ぎし我が五十
年

他の歡喜を身の歡喜とし心より言祝ぎ得ざるものあり内に
ゆく雲のあととどめぬ無作自然清しとぞ君絶讃したる
去るものは追はずと決むるさびしさを耐へつつ祈る君らが
幸を

濁流になやみ来し我清らけく注ぎて断えぬ水にあぎとふ
ものなべて移り変りて須臾だにもとどまらざれば日々新た
なり

(め が ね)

はるかなる峠の如く思ひ来し齢も過ぎて今日あり我は
筆とると飯食ふと外に出る時とそれぞれにちがふ眼鏡かけ
かふ

(雪 仏)

今日ありて明日なきいのち雪仏我や雪仏雪仏やわれ (五岳
上人雪仏画讃)

とはいのちとたのみてここに伏し拜む雪仏や雪の明日な
き姿

雪仏の画讃面白し今日ありて明日なき命とのたまふ上人

(年 末)

明日は明日はとのつびきならぬ事の他は延し延して年暮れ
んとす

自らよる年波に得にけるは無作の境地か淡々とある

ちちのみの父の齢となりけり白髪かかぶり頬骨こけて

ちちのみの父の齢となれりけり似たるや否や知らずかの父

ちちのみの父まかりしその春に生れける我や知らずその

面

ありし日の父をし知れる人もなし五十五年の年月の経て
御父のかたみと見るは経文を写し給へる文字のいくばく

(愛 欲)

愛欲も悲哀もなべて淡々と身に感ずなりわれ老いにけり
老いづくを四苦の一つにあげられし聖の教今ぞ諾ふ^{うべな}

(註) 昭和二十六年から三十年に至るまでの作品「断流」
から抄出。「横超断四流、悪趣自然閉」聖語よりこ
の題名を頂く。

著者記す

歌集「還相」

(宿業)

宿業を果すを今日の幸とこそみ名となへつついそしむ我は

(驟雨)

草も木も喜びに満ちてそよぐなり日でりつつぎのはての驟雨に

みみづから今日ある幸を称ふればみ名につながる人も浮ばむ

(名利)

無作自然をわが願ひつつつとめ居れ名利の限界一歩も出でず

(究竟依)

俱会一処の悲願にもえて先達らいやつつましく清く生きましき

つとめ努めてそのあとすらもとどめざる無作自然なる聖のみあと

朝の散歩どこをどう行ってもいい筈にコース定まるいつかおのづと

(年 末)

年末をくさくさとわが居る時を友あり遠方より来たりて語る
今日までの我が驕慢のはつかしとをつをつとそのよろこび

(年 始)

慣習的贅言とのみ聞くなかれ今年こそはとわがつぶやくを招喚の声の外には道なしと一蓮院の言のよろしき

(鐘 銘)

招喚の大悲のみ名の南無阿弥陀高くひびけと撞くやこの鐘朝夕につくやこの鐘諸人のこもる思ひの永遠にひびけよ

(祖師堂)

今吾は開山聖人の前にありひくくつぶやく南無阿弥陀仏故郷に帰り来し思ひ湧き来なり京の祖堂にまうで来ぬれば

(鳥濤へおこ)

去りにしを追ふも未練と自らに言ひ聞かせ居り暗憺として

縁あればあるひは来たりあるは去る吾がみ聖の言のよろし

み聖の深きみさとしひびけども鳥濤のわが身のなくさまなく

音もなく流れ去りゆき還るなし見つつさびしも川というもの

真実を語る難さやくどくどくくりかへし言ひてなほ尽し得ず

ことごとくに怒り腹立つわが癖の変ることなし耳順の齢に今やうやく祖父等の嘆きうべなはる命長ければ恥多しとふ

(註) 昭和三十年九月より三十四年十二月までの作中から選出したもの。老来愛いよく繁く「還相」など

と行いすました名は恥ずかしく、ただ還暦にちなんでつけました。

昭和三十五年五月。 著者記す。

歌集「遊林」

(御 名)

み名のまこと伝ふるまでぞみ名をおきて末とほりたる何物やある

(善 人)

我は正し悪しきはすべて他にありときめてかかりて省るなわれは悪しと思ふことなきこの人に今更我の言ふこともなし

(童形の太子)

童形の既戸皇子もろ掌合せひざまづきませり赤き袴着けて山の端ゆ出づる月光にもろ手合せ南無仏と称え居ますとこ

(真 諦)

あはれこの童形の皇子何人の作なる知らずただただ見呆く思へば

(真 諦)

極めつくしあますなしとぞ誇示したり若かりしかな今にし一流の真諦は正にこれなりと説ききかせたり友にも大衆に

(鳥濤へおこ)

去りにしを追ふも未練と自らに言ひ聞かせ居り暗憺として

聞く所を喜び且つは得るところを嘆ずるのみとその謙虚

(愛語)

和顔愛語のみさとしに笑顔みせ居れど我執のしこりなほの
こりたる

おのづからはからはれてゐて今日あるを知らしめむとの六
字のみ名か

(有所得)

たのみつつやすらぐものとはこりしはなべてはかなき有所
得の見

これなりと握りしめたるわが真理なべはかなき有所得の見
幾度か握りしめたるまことはや若存若亡の有所得の見
無所得の八不中道遠しとほし有所得見を今知らされて

(註) 昭和三十五年より四十年二月までの作品から選出。

正信偈の「遊煩惱林現神通」から歌集名をいただく。

昭和四十二年十一月文化の日 著者記す。

本願成就文(二)

今まで第十一願とその成就について讃仰しましたが、次
に第十七願とその成就を次のように述べてあります。

第十七願には

「たといわれ仏を得んに十方世界の無量の諸仏、
ことごとく咨嗟(しさ)して我名を称せずんば、
正覚を取らじ」

と誓われ、あらゆる御苦勞のすえに遂に成就されました。

その十七願成就の文は

「十方恒沙の諸仏如来、皆共に無量寿仏の
威神功德の不可思議なるを讃歎したまう」
とあります。

諸仏讃歎の誓い

さて阿称陀仏が御自身のために諸仏に讃歎を願われる筈
はありません。唯々、御成就して下さった功德の宝の名号
一つをあらゆる迷いの衆生に惠施して、往生成仏せしめよ

病氣も亦得難き善知識 酒井函演師述

もとより、望んで求むべき病氣ではないが、自然にもた
らされるものならば、病氣もまた無下に捨て去るべきもの
でないと思われる。

飢えて乏しき折にこそお食事の尊さを知り、その生命を
受領し、渴きの極みにおいてお水の真味に触れる。同様に
病氣においてこそ健康の幸福を真実に体得せしめられ、ま
た周囲の限らない恩恵、自己の無力を思い知らされる。

更に罪業深重の久遠の凡夫なることも知らされ、いよいよ
無窮の大悲を仰ぎ、攝取不捨のお慈悲を味得せしめられ
る。病氣もまた得難い善知識であり、合掌お念仏の生活へ
お導き下さる尊い教法と申してよい。

業報に随順 全 上

業報に随順し得る身におそだてを受けしは何としても仕
合せである。救いの半面である。

多くは業報に友逆して「苦惱」を倍加し、はては自らの
破滅をまねくに至る。

何事も弥陀にまかせて南無阿弥陀

よきもあしきも 業報のまま

花田正夫

うとの切なる本願からであります。

月影のいたらぬ里はなけれども
眺むるひとのこころにぞすむ

と法然上人が仰言るように、弥陀仏の尽十方無碍の光明
はいたらぬ里もなく照らされ、あらゆる衆生の業報の一一
をすべて知りつくされて、み胸におさめて下さるのであり
ますが、その御真実が私共の心身にとどいて疑うことの出
来なくなるには、み仏のあらゆる御辛勞があります。それ
と云いますのも、私自身が猫に小判、豚に真珠のことわざ
通りにその真実を受け入れる力がないからであります。

ある僧分の方が「阿弥陀経に東方、南方、等々と六方の
諸仏の名をあげて同じように弥陀仏の不思議の徳を讃歎せ
られていと説いてあるが、我々には釈迦一仏の讃歎で十
分。何故あのように煩瑣(はんさ)に説かれたのであろう
か」と云われたことがある。こうした読み方は単に智的理
解で自分のどんなものかに気付いてない質問であります。

私は親を最後まで看取って、野辺に送ったのに、その後帰郷すると、まだどこかに親が居るような心が数年続いた。智的に了解していても情意、身体全体にうなづくことはこんな単純なことでもオイソレとは片付けられぬ。まして、仏の真実心の疑えなくなるには、全く遠く深い宿縁に催されねばならぬ。

自身、岡山県の真言宗ばかりの村に生れ、不思議な御縁から親鸞聖人にひきつけられて、廿四の秋はじめて念仏を知らされて六十七歳の今日までその一筋を辿らせて頂いているが、それには沢山の方々のおそだてに与っており、或は前から手を引かれ、後ろから押し上げられ、或は右に寄り添い、左にたすけられて……。しかも知り得るものは極くわずかで、氣つき得ない御恩は大海の潮のようで、山村暮鳥の詩の

ああ 勿体ない ああ勿体ない

どちらに向いて拜もうか

陽は西に沈む 月は東にのぼる

を思い浮べる。

親鸞聖人は、愚人禿人と名告られて、わが御身にひきかけて、よき人法然上人を勢至菩薩、聖徳太子を観音菩薩と仰ぎ、七祖方を浄土の使者と慕われ、釈尊を久遠実成の弥陀仏の応現と渴仰されて、遠く深い宿縁を謝して居られ

して、未だ不完全であると省み、姑の不完全さも無理からぬことと理解して、相手の心をよく聞く時、姑は嫁の立場を考えて、ここに性格も環境も異なる者同志のいのちの交流が出来、姑も嫁も共に生きる道がひらけるように。

さて十方恒沙の諸仏について、実際の私の生活の上でどう味っているかと申せば、私を本願海に導き入れ、念仏させて下さる力の上に諸仏の光を仰ぐ。そこにきびしい教の鏡によって私の姿を映し出して下さるもの、その穢悪の身に寄り添うて同座して下さり、廣大無辺の大悲を指差して下さるもの、或は煩惱の僅かな満足に、あがりあがって落ち場を知らぬ身に、無常を知らせて下さる近親者の死の警告、等々、順縁逆縁の一切を貫ぬいて、私にとって

は諸仏の光りをいただいている。

芭蕉翁は俳諧の道の上であるが「見るもの花にあらずと述べているが、心して頂けば、三世を貫ぬき十方に遍く、内外を問わずあらゆる世界に仏陀の慈光は入り満ちて下さるけれども、煩惱妄念に覆われた私には、見ることが出来ない。見ることは出来ないけれども、幸にも仏を信する者には、そのことは疑うことの出来ない真実とうなづかされる。

煩惱にまなこさえられて撰取の光明見ざれども

る。これみな、いりかわり立ちかわつての諸仏讃歎の御恩であり、本にかえせば弥陀仏の御誓いのお陰である。

十方恒沙の諸仏とは

大無量寿経の浄土の莊嚴を説かれているところに、華光出仏とある。弥陀仏のさとりに至極の境界である浄土にひらく華から無数の光が放たれ、その光から無数の仏身が現れるとある、聖人は浄土和讃に

一一のはなのなかよりは三十六百千億の

光明でらしてほがらかにいたらぬところはさらになし。

一一のはなのなかよりは三十六百千億の

仏身もひかりもひとしくて相好金山のごとくなり。

相好ごとに百千のひかりを十方にはなちてぞ

つねに妙法ときひろめ衆生を仏道にいらしむる。

と、その不思議なはたらきを讃仰されている。

ここに諸仏は皆ことごとく弥陀仏におさまっているのである。これが絶対教のもつすばらしさである。相對の教では、最高なものを立てると、他は低きものとして排するが絶対なる教は、相手を生かすことによって自らも生き、自ら生きることにによって他も生かされるという趣きがある。たとえば、或家にとついだ嫁が姑のすることを吉い、つまらぬと排するだけでは風波はたえぬ。自分の考えはそれと

大悲ものうきことなくて常に我身をてらすなり

この「不見の見」の妙味を信心の光りによって恵まれることは本当にありがたいことである。徒然草(つれづれぐさ)の著者は「花は盛りには月は隈なきをのみ見るべきかは雨にむかいて月をこひ、たれこめて春の行衛しらぬも、なおあわれに情ふかし。咲きぬべきほどの梢、ちりしおれたる庭などこそ見所お、けれ云々」と花蝶風月に托してその味わいをのべている。見えたことを喜ぶ人は、見えなくならないと喜びは空しくなる、見、不見をこえた真実こそ、いよいよたのもしいかぎり、そこにいたって、何のほからいも無用である。

弥陀仏の威神功德の不可思議

諸仏が、ひとり弥陀仏の威神力と名号の大功徳の不可思議なことを、口を揃えて讃歎されるのである。

さて昔から、英雄にして英雄を知り、駿馬は伯楽を待つて見出されると云う。弥陀仏の不思議なお力と、その無上の功德は、ひとり仏によってのみ見出され、また讃歎されるものである。特に仏教では随喜の徳を説いて、心から他の善行を随喜出来る者は、善行をする人と同じ徳を持つといわれる。

或時、青年が「仏像に形ばかり頭を下げて心からは仲々下らぬ」と言つて、私の札拜する心をたずねたことがあ

る。そこで早速、一水四見といつて、同じ水でも見る者によつて異なる、魚には住家とうつり、餓鬼には火焰となる。仏像に向つて心から拝めないのは、その中にこもる真実を見出せないからである。猫に小判のたとえ通りであるが、ここに、自分の眼の視力をよく省みねばならぬ。私自身も、初めは自分は正しく見ることが出来ると過信していたが、段々教えられると、無常の世にありながら何時までも死なぬ積りでおり、生みの親をさえ火鉢あつかいしか出来ぬ、火鉢は冬はありがたいが夏は邪魔物となるように、自分勝手な心でしか親を見ることの出来ぬ私である、真実微妙な電波は常に働いていても、ラジオもテレビもない家には音も姿もあらわれぬように、自分のような愚かな盲人には、本当の貴いものを見出すことは出来ないし知らされた時、弥陀仏の本願は、かかる愚鈍な者をこそ悲憐されておこされたこと知らされ、生れてはじめて、ありがたいなあ！とお礼の言葉が私の口から出はじめたのだと談合し、それからその青年は熱心に道を求め、愚さに気付いて念仏者となった。

信友がフランス語に歎異抄を訳したので序文を頼まれた時、「この書をひもとく者が、自分は知恵がある、自分は善いことをしていると思いがっている時、この書の一字一句も読めない。これに反して、自分は本当のことは何一

と も し び

如来誓願の葉は、よく智愚の毒を滅す

(教行信証、信巻)

一句の法文をも暗誦出来ぬ愚者ヘントクが、その愚さのために兄からも見捨てられて、精舎の門前で歎き悲しんでいた時、そのことを察知せられた積尊が

「ハントク悲しむことはいらない。愚者のくせに智者と思っているのが本当の愚者で、愚者が愚者と知るのには正しい知恵である」

とおしえ慰められて彼の心を一変せしめたもうた。

舍利仏の叔父でバラモン僧の長老で智慧すぐれたマカクが、仏をたずね「私はすべてを否定し得ます」と豪語した時、即座に積尊は「一切を否定し得る汝が、否定することを肯定しているではないか。汝自身をなぜ否定し得ないのか？」と、無我の智慧をもつてさとされると、さすがの長老も慢心を恥じてやがて仏弟子となった。

闇夜にこそランプと電灯がそのあかるさを競うが、一度

つ知る力もない、善の道に進むどころか、悪業にしばらくた足無しであると知る人には、本抄の全文が、その人に光を放つて集中し、心の黑暗を破り、罪障の水をとかし、浄土への扉がおのずからひらかれるであろう」というようなことを書き送った。

仏教では、不思議という言葉が度々くりかえされているが、蓮如上人が仰言るように、「凡夫が仏になれるのが本当の不思議」である。仏の威神力とその名号の大善大功德は凡夫成仏への不思議を成就して下さるのである。十方の無数の諸仏は、このことを力の限り讃仰して、私共に一人のこらず知らせて、信をおすすめ下さるのである。

続く

曰杵祖山老師の法語

大無量寿経に、不請の法、不請の友、と仰せられてある。南無は私が、どうぞ、とたのたのでない。親様が、助かってくれよ、救わねばおかぬよ、と念じ通しに念じて居て下さる。

私が念仏するのではない、親様が念じ通しに念じて下さる故に、常念仏です。それではなくては救われぬ私ではないですかナア一云々。

(註) 酒井幽演師の最後の病床を見舞われてのお法語

聚 墨 生

太陽があらわれると、それらはみな光力を奪われて、同じ明るさの中に小さい部屋ばかりでなしに、山も野も海も照らし出されるように、仏の不可思議の智光の輝くところ、智者の慢心も、愚者の卑屈も滅して、白い色には白い光、赤い色には赤い光と、おの／＼そのところを得しめ、その人でなくては出来ない働きを發揮させて下さる。

(四十四年十二月十四日)

御名を称するに、能く衆生一切の無明を破し、能く衆生一切の志願を満したもう

(教行信証・行巻)

南方の孤島で航空機の爆撃と艦砲射撃に戦争末期にさらされた友人が、

「多くの戦友の最後の声は、お母あ／＼であった。この声とともに顔の苦渋の相がほぐれやすらかに息が絶えた」と聞かせてくれた。

お母あノとは実に不思議な言葉である。オの字もカの字も云えぬ時から、お母さんが、お母さんがと子に寄りそうて、子の呼ぶべき名をもって名告(なの)り続ける母の念力で、やがて、お母あノと子は呼びかえし、子のいのちのあろう限り、一つ呼び名に母と子がとけあって、そのまま子の励ましとなり、慰めとなり、力となって温め続けてやまない。

さて、南無阿弥陀仏とは、私共の呼ぶべき御名をもって仏自らが名告り出て下さる言葉である。これは仏が私共に向って下さる時、御自身を没して私共になりきって下さる場所に自然に出る御声である。私共はこの御名において私の身に入り満ちて下さるお慈悲と、私のすべてを理解して下さるお智慧に触れ、おのずとほのほのと心の闇が破られ私共の真実の志願往生成仏への道がひらかれてくる。

(四十五年一月二十五日)

病患(やまい)もまた善知識なり

(永観律師・法語)

京都の禅林寺の永観律師は、智徳兼備のすぐれた学僧であつたが、病弱のため名利を投げすてて専修念仏の人になられ、本尊の弥陀仏がみかえりのすがたをあらわされたと伝えられる。

すべて水火の難に随することを畏れざれ

(善導大師、観経疏)

何事か思うようにならぬことが起ると、責任を他に負わせてこれを責め、次から次へと要求するのは、眼を外にむける私共の常の姿であるが、これだけでは水掛け論になつて、はてには強い者勝ちとなる。

これと反対に、自らの責任であると、眼を内に向けて、自分自身を責めたてていったのでは、百千の生命があつても、その責めをつぐなうことはむづかしい。

清沢満之師は

「如来を信する身はしやわせなるかな、すべての責任の重荷をおろして、如来の御はからいにまかせ、如来の慈光下に昌平の生活を送ることを得る」といわれている。

眼を外にむけても本當の解決のない身も「我能く汝を護らん、すべて水火の難に随することをおそれざれ」との如来の大悲心を知らされてみれば、おのずから道がひらけ「波間道なく、道縦横なり」の妙趣がある。

盛岡の妙好人、清水凡禿居士の歌に

進むとも 退ぞくもはたどとまるも

よも苦は去らじ御名となえかし

とあるが、短刀直入に味われた感慨である。

(四十五年四月五日)

私は病床にあつてこの法語に非常に心うたれた。とくに長期療養ともなれば、内外の障りやら身心の苦惱が迫つてグチも出るが、人間の弱さや人心の実際も知らされ、慢心と虚飾に埋まつた自分のすがたが照らし出されるとともにかねてからこころした私どもの心底を知り尽くされた仏陀の深く広い大悲の心が身にしんでくる。

律師にしてみれば智慧もすぐれ徳も高い方でありながら病弱のために学僧としての榮譽を断念せられ、愚夫愚婦に同じられて念仏者となられるまでには非常な御苦難があつたと思う。しかしそこに帰られた上から御自身を省みられた時、「若し丈夫で思うまゝの生活していたら浮調子なままで空しく終つたであろうのに、病氣のおかげで眼をさまされた、いやで苦しい病もまた善い知識であつた」と痛感されたことであろう。

ガンで死を自覚せられた白杵(うすき)祖山老師の遺詠に「さわりなくすべてを照らすみ光はさわりある身の上にごそ照る」とある。不治の病床のあらゆる障りの中で、種々の煩惱の渦巻く中に、それを飽くまでも憐れみ、捨てたまわぬ無碍光をいよいよ渴仰せられた信味である。

(四十五年三月十五日)

汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らん。

若し人仏智を得れば、議論心みな滅す。たとえは日出ずるとき朝露一時に失う如し。

(大智度論・偈)

自由と平和は人類が願つてやまぬ大きな理想であるが、過去の歴史と現在の世相が示すように、人間社会は不自由と闘争の連続である。だから目を外に向けてそれを求めるばかりでなしにそのさまたげになる内心に目を向けよう。利己心から起る限りない欲情、それが満たされぬ時の激しい怒りとねたみとにくみ等々。舌切り雀のお伽話の欲深か婆さんの葛籠(つづら)から出た怪物のように、なんと恐ろしい障りの多いことか。この始末が出来ない限り、これからも自由と平和の光の影は射さない。

その煩惱に対処するに二つの道がある。自分の力をもととしてそれを制するか、あるいはその障りを持つたまま、そこに仏の慈光を頂いて罪障の水を転じて功德の水にしていただく道である。そのいずれを選ぶかは、自分の能力を知ることできる。私自身は、その始末のつかない身であるからその後者の道を辿らせてもらつている、それは仏がかねてから私のような者を見抜かれて、そのために開いて下さつた道であつた。

(四十五年五月十七日)

伏は先立... 気が伏氣する意

あ

と

が

き



長いうつもしい極雨もすぎで、いよいよ三伏の夏がきました。晴れわたる青空を仰いで、峠三吉さんの原爆の詩が思い浮びます。

ちちをかえせ
ははをかえせ
としよりをかえせ
こどもをかえせ
わたしをかえせ
わたしにつながる
にんげんをかえせ
にんげんのかえり
にんげんよにあるかぎり
くずれぬへいわを
へいわをかえせ
峠さんも原爆症ですでに亡くなられましたが、そうした渦中にあつての切ない願いに私共の心身はゆり動かされますことです。

十五日は敗戦の日、生きのこる私共には何時までも忘れられぬ悲しみの日でありましたが、このことが日本の行方に大きなよき指針となりますように願わずには居られません。

ようやく七月号から発行が順調になりホツとしております。これは私の病気のせいではありません。印刷所の都合によりです。どうか私の病気のことは御休心下さいますように。と申しますのも少々再発のきざしがありましてその都度適当の処置をうけておりますので今のところ安心でありますから。

近角先生の「因果応報は宗教的自覚に外ならず」のお説を最近になって、「本当にそうです」と遅鈍な身は、うなづかせて頂き、改めて掲げました。身びいきで、身勝手な心のかたまりとも、云べき私には、正しい因果応報の道理もわからず、責任を他人のせいにしたり、それも出来ない時は運命という怪物を作り出して、自分の責任を逃避しようとしませす。唯こうした中にあつて、善悪、美醜、賢愚の一切を理解して下さつて、どうあろうとも広大なみむねにおさめて下さるお方の前に、まともに因果応報をうべなうことも出来はじめるのであります。自分が見下げられると反駁し、反対に買いかぶられると偽善におちますが、全体を理解されるお方の前ではおちついてありのまゝの姿で居ることも出来ることは誰しもよく経験することでしょう。

御案内

○毎月第一、二、三日曜、午後一時半
南區駈上町二ノ八八
一道会例会

○毎月二十四日。午前午後。教西寺
法話会
昭和区小桜町

定価	半年 二百五十円 (送共)
	一年 五百円 (送共)
編集・発行人	花田 正夫
印刷人	吉野 穂志郎
発行所	慈光社
振替口座	名古屋一〇四七〇番
郵便番号	四五七

名古屋市南区駈上町二ノ八八
電話八二一〇七〇三七番

慈光第二十二卷 第七号 昭和四十五年八月十五日発行 (毎月一回、十五日発行)
昭和二十四年七月 第三種郵便物認可